

平成18年2月21日

賀来宏和

路地園芸プロジェクト講演要旨

「世界一の江戸園芸」

○100年ぶりに訪れたガーデニングブーム

- ・ガーデニングブームを再起させた「国際花と緑の博覧会」

「日本のガーデニングブームの火付け役は、平成2年に大阪で開催された『国際花と緑の博覧会』だと思います。広大な場所を使って、平面的に、また、立体的にデザインされた植物が人間の社会にもたらす可能性をあれこれと提示して見せたあの花博は、日本の花文化を大きく転換させたと思います。」

【小笠原 亮著 「江戸の園芸 平成のガーデニング」(小学館)】

- ・国際園芸博覧会とは
 - * 19世紀中ごろ(1800年代中ごろ)に始まった世界の園芸博覧会やフラワーショーの原点
- ・アジアで初めての国際園芸博覧会「国際花と緑の博覧会」
- ・わが国で3回目の国際園芸博覧会「浜名湖花博」
- ・「浜名湖花博」の3つのねらい
 - * 庭文化の創造
 - * わが国の伝統園芸文化の保存継承
 - * 植物に関する知識や興味の一層の普及
- ・2つ目のねらいに沿った「浜名湖花博」の「園芸文化館」
 - * 静岡と伝統園芸(徳川家康に始まった江戸の園芸)
 - * 伝統園芸の盛んな静岡県
 - * シーボルトも訪れた帯笑園

○ビデオ上映「大江戸花暦」

- * 「浜名湖花博」の「園芸文化館」より

○世界を凌駕した江戸園芸

・ 観賞対象としての園芸

- * 花を手向けたネアンデルタール人（数万年前）
- * 食糧や飼料、衣料などの対象として植物が栽培化から、呪術的な意味合い、やがて観賞対象

・ 東洋と西洋の二大潮流

- * 西洋では、西アジアのメソポタミア等、エジプト、ギリシャ、ローマへ、中世に西ヨーロッパに渡り、今日の欧米の園芸文化へ
- * 東洋では大陸にその起源を有し、宋（960～1279）（日本史上では平安末期から鎌倉時代）の時代に最盛期
- * わが国においては、大陸から観賞園芸も渡来、独自の園芸文化が醸成され、江戸期には世界の水準を凌駕
- * 東西の園芸植物は移動しているが、独自の発展を遂げたのが東西の園芸文化
- * 時として投機に至るまでの熱狂を呈する隆盛を見せるのも園芸の特徴

世界の花卉園芸の文化で、いちばん古いのは西アジアのメソポタミア、アッシリア、バビロンで、文明の発生とともに始まった。これにエジプトが参加し、その後にローマに伝播し、さらに中世には西ヨーロッパに至り、16世紀以降西ヨーロッパ、つづいてアメリカで大展開したのが、西洋花卉園芸文化の系譜である。メソポタミア、エジプト、ローマなど地中海地域で展開した花卉園芸文化は、いわば西洋花卉園芸文化の第一次センター（プライマリー・センター）とよびうるだろう。

これから発展して、西ヨーロッパでは、中世以降、サボテンの横芽のようにその上の花卉文化が発芽し、それが今では巨大に生長してきた。（図略）

その勢力はアメリカをふくむようになり、さらに全世界に影響をおよぼしてきた。この西ヨーロッパのセンターは第二次センター（セコンダリー・センター）といえる。（中略）

西洋の花卉園芸文化に対するもう一つの花卉園芸文化は、東洋花卉園芸文化である。それははじめ中国におこった。中国が第一次センターといえる。（中略）

このセンターから、日本という、花卉園芸文化第二次センターが生まれ、第一次センターをしのぐ大発展をとげることになるのは、図に示すごとくである。

中国では周代から花卉の栽培、観賞がはじまったようで、隋、唐の頃には、中国の花卉園芸は一つのピークにのぼってきた。第二回目のピークは宋代、特に南宋の時代と私は見ている。

中国の伝統的花卉園芸の特色は灌木性、または高木性の樹木の花をたくさん園芸化した

ことである。

【中尾佐助著「花と木の文化史」より引用・構成】

- ・わが国の園芸史（江戸園芸までの歴史）
 - * 大陸との交流の中で観賞園芸も伝播
 - * 次第に独自の価値観による観賞園芸が発達し、わが国固有の野生種からわが国で独自に園芸化がなされる植物も出現（サクラは日本で園芸化）
 - * 貴族や武士が嗜んだ教養としての園芸（江戸期直前はツバキ）
- ・三大将軍が生んだ江戸園芸
 - * 徳川三代の将軍による園芸嗜好が300年にわたる膨大な時間と労力を背景としてわが国特有の園芸文化を開花
 - * 泰平の世がもたらした美意識や価値観あるいは教養への関心などが、職人の技とともに生み出した日本固有のものであり、世界的にも類例なし
- ・その後の江戸園芸
 - * 明治以降、近代園芸が始まる一方、新しく移入された植物をも含め江戸時代に培われた価値観によって観賞される園芸も一層の発展
 - * 第二次大戦以降、江戸園芸は、一部の好事家を除き、一般的な興味の対象として忘却されたが、文化遺産としての保存継承の重要性

江戸時代の園芸文化はアジアの花弁園芸文化の第二次センターとして、日本の特色を発揮して、大発展をした。それは中国という第一次センターを凌駕し、また西ヨーロッパに優るとも劣らずというより、一時期、たとえば江戸中期の元禄時代などには、西ヨーロッパより先進していたと評価できるものである。江戸期の日本の花弁園芸文化は全世界の花弁園芸文化の中で、もっとも特色のある輝かしい一時期である。

【中尾佐助著「花と木の文化史」より引用・構成】

○江戸園芸の特徴

- ・「変わり葉」へのこだわり
 - * 「花」ではなく「葉」に変化の妙と美しさの観賞価値
- ・「たおやかな美しさ」へのこだわり
 - * 自然の中からもまれに出現する特殊な形質を「芸」と称して珍重し、弱々しく育てにくい個体を尊ぶ「たおやかさ」を尊重する美意識
- ・わずかな個体の変異の中から自然選抜
 - * 交配ではなく基本的には自然におけるわずかな個体の変異の中から珍しいものを選抜

- ・人間の技との組み合わせ
 - * 品種の特徴を維持していくためには、栽培方法に特別な技術や工夫が必要
 - * 植物個体の持つ性質と人間の持つ技が組み合わさって初めて品種として認知され、維持されるという独特の評価体系
- ・植物観賞のための装飾や作法の存在
 - * 植物に求められる観賞の対象
 - * 装飾の様式を定めて観賞を行う作法
 - * 観賞する側の作法
- ・園芸書の出版などの知識と教養への結びつき
 - * 植物の流行にあわせた数多くの園芸書の出版や植物につけられた古典文学や歴史に因む品種名など知識と教養への結びつき
- ・遊び心を前提
 - * 庶民文化が花開いた時代の中で、品種の優劣を競う銘鑑の作成や花合わせ
 - * 庶民を相手に花の装飾を見世物とする興行や花屋敷の開園
- ・身分を超越した広がり

江戸期の日本の園芸文化の特色を数え上げると次のような諸点が指摘できる。

- ①園芸文化が世界に先がけて、庶民の末端まで普及した。
- ②中国の花卉園芸がシャクヤク、キクなどを除いて、庭木の花木類が中心であったのに、日本では草本性のサクラソウ、ハナショウブなどを園芸化し、それを改良して多数の変った品種をつくりあげた。
- ③古典園芸植物とよばれるいくつかの小型の栽培植物を尊重して、奇妙な品種をつくりだしてきた。
- ④変化咲きアサガオとよばれる、毎年その種子を創造的な手法でつくりだす園芸、つまりパフォーマンスの極致の園芸が生まれた。
- ⑤造園用の特色のある樹木、灌木の品種がつくられ、ツツジ類や針葉樹のヒバ類と総称されるものが成立した。
- ⑥盆栽が中国的な盆景から蛸造り型をへて、自然美型盆栽へとすすんだ。
- ⑦斑入り葉のある斑入り植物の価値を認識し、きわめて多種類のそのような品種を世界に先がけてつくりあげた。
- ⑧花見や菊人形のような大衆の参加する花卉文化が発展した
- ⑨花卉の同好団体が多く誕生した。
- ⑩植木屋、庭師といった花卉園芸の専門業者が出現した。また園芸書の出版がはじまった。

【中尾佐助著「花と木の文化史」より引用・構成】

○将軍から庶民への300年

- ・徳川家康から始まった江戸園芸
- ・続く二代の将軍も花好き
- ・大名が献上する珍しい地方の植物
- ・大名の庭園づくり（1600年代中ごろから）
 - * 参勤交代による大名の定住化
 - * 明暦の大火による空地作り
- ・生業としての種樹家（造園家、植木屋）の始まり（1600年代後半）
 - * 藤堂高虎邸に出入りした伊藤伊兵衛
 - * 霧島屋の屋号
- ・庭園用の樹木から草花への嗜好（1700年代）
 - * 花見とあわせた園芸の庶民化
- ・こだわりの園芸（1700年代後半から）
 - * サクラソウ、マツバラン、オモト、ハナショウブ、変化朝顔、カラタチバナ、ヤブコウジ、福寿草、フウキラン等
 - * 松平定信（1758～1829）の欲恩園（ハス、ウメ、サクラ、ツバキなど）
 - * 松平定朝（1773～1856）のハナショウブ（宇宙、不背玉、獅子奮迅、月下之波などの秘花）
 - * 水野忠暁（1767～1834）の斑入り植物（「草木錦葉集」の出版）
- ・庶民園芸と超高度な園芸（1800年代）
 - * 次々と訪れるブーム
 - * 花屋敷の誕生と庶民園芸

○外国人が驚嘆した江戸の町と人

- ・外国人が驚嘆した園芸の発達
 - * シーボルト、オールコック

非常に有名な植物園があると聞いたので、ドクトル・ビュルガーと先発し、数時間後に原についた。日本風につくられたこの庭園は、私がこれまでにこの国で見たもののうちでいちばん美しく、観賞植物も非常に豊富である。

【シーボルト著「江戸参府紀行」より引用・構成】

日本人は偉大なしろうと園芸家であって、地球上のこの地域におけるもっとも立派な植物の見本の一部が江戸の近辺に存在している。一般に、花を相当に栽培している日本の園芸家たちは、売る目的で栽培しているのだ。かれらは、四季をつうじてもっとも珍重される種類のもを供給するように栽培している。だから、いかなる日でも、花売りが美しい商品をもって歩き回る姿を見ることが出来る。

【ラザフォード・オールコック著「大君の都」より引用・構成】

・園芸家ロバート・フォーチュンの見た江戸

* 英国王立園芸協会からアオキの雄木を収集すべく派遣

染井や団子坂の苗木園のいちじるしい特色は、多彩な葉を持つ観葉植物が豊富にあることだ。ヨーロッパ人の趣味が、変わり色の観葉植物とよばれる、自然の珍しい斑入りの葉を持つ植物を賞賛し、興味を持つようになったのは、つい数年来のことである。これに反して、私の知る限りでは、日本では千年も前から、この趣味を育ててきたということだ。その結果、日本の観葉植物は、たいてい変った形態にして栽培するので、その多くは非常にみごとである。(中略) 斑入りのラン! 斑入りのシュロ! 斑入りのツバキ! そしてチャの木でさえも、まさしくこの「楽しき一族」を表徴している。「アジアで最上の針葉樹の一つ」を確信するマキも、葉に金色のたてじまの入った変種が栽培されていた。

【ロバート・フォーチュン著・三宅馨訳「江戸と北京」より引用・構成】

交互に樹々や庭、格好よく刈り込んだ生垣がつづいている、公園のような景色に来たとき、随行の役人が染井村にやっと着いた、と報せた。その村全体が多くの苗木園で網羅され、それらを連絡する一直線の道が、一マイル以上もつづいている。私は世界のどこへ行っても、こんなに大規模に、売り物の植物を栽培しているのを見たことがない。植木屋はそれぞれ、三、四エーカーの地域を占め、鉢植えや露地植えのいずれも、数千の植物がよく管理されている。

【ロバート・フォーチュン著・三宅馨訳「江戸と北京」より引用・構成】

大きな並木道や、松、特にスギの並木にしばしば出会ったが、道ばたに大変心地よい日陰をつくっている。ときどき種々の種類の常緑のカシヤ、時にはスギや他の常緑樹でつくられた見事な生垣に注目した、生垣は丁寧に刈り込まれて、手入れがゆきとどき、時にはかなりの高さに整枝されて、イギリスの貴族の庭園や公園でよく見かける、ヒイラギやイチイの高い生垣を思い出させる。

【ロバート・フォーチュン著・三宅馨訳「江戸と北京」より引用・構成】

川岸に沿って行くと程なく、近くに家の見当たらず田舎に到達した。背後を眺めると、川の向こうに寺院や物見櫓や木の茂った丘の起伏など、江戸の町が眼前に広がって、ひととき美しい絵のようであった。その場所全体がまるで一大庭園であった。

【ロバート・フォーチュン著・三宅馨訳「江戸と北京」より引用・構成】

日本人の国民性のいちじるしい特色は、下層階級でもみな生来の花好きであるということだ。気晴らしにしじゅう好きな植物を少し育てて、無上の楽しみにしている。もしも花を愛する国民性が、人間の文化生活の高さを証明するものであるとすれば、日本の低い層の人びとは、イギリスの同じ階級の人たちに比べると、ずっと優って見える。

【ロバート・フォーチュン著・三宅馨訳「江戸と北京」より引用・構成】